



# なぜ「道具」ではなく「民具」なのか

河野 通明 (神奈川大学日本常民文化研究所 教授 / COE事業推進担当者)

## 1 なぜ道具ではいけないの？

昨年11月の国際シンポジウムの際、「民具と民俗技術」というタイトルを掲げたが、その準備段階で「なぜ民具というのか。道具ではいけないのか」と問いただされる場面がしばしばあった。わたしは日本民具学会の会員であり、神奈川大学日本常民文化研究所の所員としては『民具マンスリー』の編集も担当しているが、あらためて民具とは何かを自ら問い直す必要に迫られたのである。

もとはといえば、わたしは民具という言葉はさほど好きではなかった。民具の「民」という字に柳宗悦流の民芸のおいが感じられて、科学的歴史学を標榜してきた者にとっては肌が合わなかったからである。にもかかわらず民具学会に入会したのは、会に入れば博物館関係者と知り合いになれて収蔵庫が見せてもらえるという、まったく実利的な理由からであった。それから20数年、気が付いてみれば機会あるごとに民具の大切さを訴えている自分がある。その理由は何なのか。

まず民具という言葉は便利である。博物館・資料館で「民具を見せてください」といえば通じるし、講演会での「民具は住民遺産、みんなで守りましょう」という訴えも聴衆に通じる。だがこれだけでは「なぜ道具ではいけないのか」と問いかげには耐えられない。そこであらためていま自分はなぜ民具と呼んでいるのかを整理してみた。

## 2 機能情報と付帯情報

一例をあげよう。図1は葛飾区郷土と天文の博物館の犁からすきである。道具は使うものだから用途に適合した形をもっており、形を見れば使い途はだいたい見当が付く。たとえば金槌を見れば釘を打つ道具だと分かるし、傘をみれば雨の日に広げてさすものだと分かる。同様にこの写真をみれば年配の人なら牛馬に引かせて田畑を耕す道具と理解できよう。この形の発している“この道具は何に使ったものか”という情報を「機能情報」と呼んでおこう。だがこの犁の形態は、機能情報以外にも次のような重要な情報を発信している。

まず馬に向かって伸びる犁りえんは上方に反っているが、これは乾燥による歪みと考えられ、もとは直棒であろう。直棒犁は朝鮮系無床犁の要素である。それに対して長い犁床は中国系、つまりこの犁は朝鮮系と中国系の混血型である。朝鮮系要素はこの地域か近辺に朝鮮系渡来人によって無床犁が持ち込まれた事実があったことを示しているが、中国人については大挙して日本に渡来したという歴史は知られていない。なのになぜ中国犁との混血が起こったのか。

## 3 大化改新政府に殖産興業政策があった

これまでの犁・馬鍬・首木・鞍の広域調査から得られた結論を総合すれば、<sup>(1)(2)</sup>大化改新政府が遣唐使を通じて唐の長床犁を入手し、それを日本の実情にあわせて改良した政府モデル犁をつくって全国の評督このりのかみ(のちの郡司)あてに流したらしい。設計図で技術伝達のできる時代ではないので、実物模型を500~600ほど作って全国に送ったと考えられる。この政府モデル犁にもとづくコピーと考えられる7世紀中葉の犁が兵庫県梶原遺跡や香川県下川津遺跡から出土しており、それをもとにして作った政府モデル犁の復原図が図2である。

この犁はアジアでも特異な一木造りの犁へらを備えている。犁へらはアジアでは中国でも朝鮮半島でも鉄製、それも鋳造品であるが、鉄資源の不足した日本では、鉄製犁へらでは地方への普及は無理とみて、木製犁へらモデルを作ったのであろう。また犁先は鍛造V字形犁先が付けられているが、これもアジアでは特異なもので、アジアで一般的な鋳造犁先は地方で生産するのは無理とみて、当時普及しはじめていたU字形鍬先をアレンジした鍛造V字形犁先に変更したものと考えられる。

## 4 犁は変わらないのが当たり前

これまで農具はその土地の地形や土質にあわせて少しずつ変化してきたのだと信じられてきた。ところが犁のような外来の農具を手がかりに検討していくと、形の違

いは朝鮮系か政府モデル系か、あるいは両者の混血かで基本的には決まってしまうのであり、現在見る形は風土に適応した結果などではなく、その地に朝鮮系渡来人が来たか来なかったか、渡来人の出身地はどこかなどという歴史的事情によって規定されていることが明らかになってきた。したがって犁の形の違いは、その地域の古代史を解く手がかりとなるのである。

## 5 混血の要素を解析

そこで葛飾の犁に戻ると、直棒犁轅は朝鮮系で、長い犁床と犁頭の盛り上がりは政府モデル犁の一木犁への痕跡で、上部を丸い板で補っているのは、一木犁への上部が割れて欠け落ちたため板で補って補修した跡であり、それが更新の際にも継承され定型化したものと考えられる。また左反転方式も柄の末端の把手の形状も政府モデル犁からの継承である。つまり葛飾の犁は7世紀後半の中大兄 = 天智政権がおこなった長床犁導入政策が、間違いなく関東にまで及んでいたことを示している。

## 6 東アジアの激動が犁型に刻印される

民具のなかでも犁はもっとも変化しにくい部類のようで、隣村でたとえすぐれた形のもが使われていても容易に影響されず、先祖伝来の形を墨守して20世紀に及んでいる例が多々見られる。この保守性の強い犁に混血が起こっていることからすれば、政府モデル犁の普及にはかなりの強制力がかかっていたと想定される。

7世紀の東アジアは唐帝国の周辺諸国への侵略を軸として展開した激動の時代であり、唐からの長床犁導入政策は、中大兄 = 天智政権による富国強兵策の一環をなしていたようである。その状況下で伝統的な権威に依りかかってきた各地の旧国造勢力 = 評督も安閑くにおみやことしてはいられなくなった。律令制に向かってひた走る新体制に乗り遅れまいと、一族の存亡をかけて政府モデル犁の普及に奔走していたのかも知れない。葛飾の混血型犁は、そうした7世紀後半のアジアの激動の地域での展開の産物と考えられる。そして同様の混血型犁は、九州から関東までの各地で、多様なバラエティーで検出されてきている。

## 7 附帯情報が重要 だから「民具」

以上に見たように、民具の形には機能情報のほかにその民具がたどってきた歴史、言いかえればその地に生きてきた人々の古代以来の歴史情報がおどろくほど豊かに保存されている。ある人が葛飾の犁を「道具」と呼ぶ場



図1 葛飾の犁（葛飾区郷土と天文の博物館）

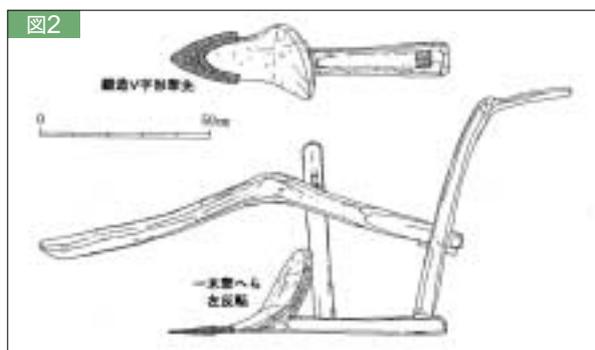


図2 政府モデル犁の復原図（注2）河野2004）

合は、機能情報以外の附帯情報には関心がないことを表明している。農業技術史を追っているわたしは機能情報にはもちろん重視するが、それ以上に附帯情報にも強い関心を向けている。この立場からは、葛飾の犁は単なる「道具」ではなく「民具」なのである。

## 8 民具という非文字資料の体系化

民具が附帯情報として豊かな歴史民俗情報を保有しているなら、民具こそ非文字資料の代表格であり、その体系化を通して文字資料には記録されなかった歴史が復原できる。『古事記』や『日本書紀』は都の天皇・貴族の政治・外交情報しか記録していないが、各地に残る民具からは、それぞれの地域の庶民のアジアに連動する古代史が復原でき、日中韓の合同調査を実施すれば、東アジア規模での民族移動をともなう激動の庶民史が復原できよう。そのためまず日本で「民具からの歴史学」の方法論を確立しようと、各地の資料館の民具調査を続けている。

80年前、渋沢敬三は物証から庶民の歴史をたどろうと民具研究の登山口に入った。その渋沢が夢に描いた頂上の姿が、いま行く手に姿をあらわし始めたのである。

注

- (1) 河野通明「民具の犁調査にもとづく大化改新政府の長床犁導入政策の復原」『ヒストリア』188号、2004年
- (2) 河野通明「7世紀出土一木犁へら長床犁についての総合的考察」『商経論叢』40巻2号、2004年